

心音

シュツ…シュツ…シュツ…

あの頃、俺は毎晩布団に入る度に列車の音を聞いた。発車ベルは鳴らない。だってそんなことをしたら、お母さんやお父さんにばれちまうだろう？ あの列車は俺だけの特別な秘密の列車だったんだ。毎晩迎えに来てくれて、いつも色々なところへ連れて行ってくれた。不思議なことに、朝目が覚めると布団の中だった。

色々な人とも出会った。お祭りをしている村もあつたし、変わった動物がいる国にも行った。そして、列車の旅で仲良くなった男の子もいた。その子はある国の王子様で、一人で外に遊びに行っではいけないと言われていた。そこに俺が遊びに行っって、仲良くなった。その王子様にと

って俺は初めての友達だった。

俺も王子様も子どもで、飽きることなくずつと遊んでいた。でも、時間が過ぎるのは早く、俺は朝までに帰らなくてはいけなかった。それでも俺は車掌さんをお願いして、毎日遊びに行った。王子様は毎日歓迎してくれた。とても楽しい時間だった。

けれど、王子様とは遊ぶことができなくなっ
てしまったんだ。王様が俺が王子様と遊んでい
ることに気がついたらしい。王様は「王子はい
ずれ王となるのだ。だからお前のような者と遊
んでいてはいけない」と言った。王子様は記念
に、綺麗な石の付いた金のブレスレットをくれ
た。その後も何回も列車の旅に行ったが、王子
様の国に行くことはなかった。だって俺が遊び
に行ったら、王子様が怒られてしまうだろう？
大人になった今では、もう列車は迎えに來な
い。それに列車の音だと思っていた、シュツ：

：シュツ：：シュツ：：という音も、自分の鼓動であることが分かった。

そういえば、王子様の話をお母さんにしたら「それは夢よ」と言っただけ。でも俺は違うと思う。王子様は俺にとっても初めての友達だったんだ。夢であるはずはない。今日も列車は来ないけれど、俺は耳をすまして心音を聞く。

シュツ：：シュツ：：シュツ：：

窓から入る月光に、机に置いてある金のブレスレットが淋しくきらめいた。

（不思議な物語より 心音）

